「飯田・下伊那地域における本棟造の悉皆的調査研究」

代表　金澤　雄記（長野県飯田市歴史研究所 研究員（建築史））
委員　伊藤　　毅（東京大学大学院教授　（建築学））
　　鬼塚　　博（長野県飯田市歴史研究所 元研究員（現代史））
　　竹ノ内雅人（長野県飯田市歴史研究所 研究員（近世史））

[研究報告要旨]

本研究の対象地域とする飯田市域は、長野県南部に位置し、東西を山脈で囲まれ、南北に流れる天竜川で二分された谷間の地形である。研究対象とする本棟造民家は17世紀後期から19世紀後期まで建築された中南信特有の民家建築様式であり、現在飯田市域に205棟残存確認している。そのうち取り壊し事例も含め271件を調査対象として、2008年度より206件の聞取調査を行い、85棟の実測調査を行った。本研究はその調査報告の一部である。

本棟造民家は、切妻造、妻入、石置板屋根の規模の大きな民家形式で、家の格式や建築時期、地域、また養蚕業の影響によって、間取り、構造、意匠、その他の違いが見られる。さらに現在でも建築されている地域に根付いた建築形式である。

しかしながら建物の老朽化や生活水準の変化だけでなく、建物の本来の建築形式や住生活の変化に関して認識不足という側面もあり、従来の本棟造は毎年数棟ずつ取り壊され減少している現状にある。

本研究は飯田市域の本棟造を対象として、実態の把握のため、まず調査成果に基づき各形式を分析・類型化し、基本形の定義を行った。また時代背景や住生活の変化による総括的な変遷を考察し、建築学的な位置付けを行った。

特に江戸時代後期以降、養蚕業の影響によって二階が発達したため、本来炉（イロリ）があり居間兼簡易接客の開放的な室空間であったオエが、天井（二階床）が設けられ、用途不明の暗く閉鎖的な空間が生まれたことが住生活を大きく変化させ、住みにくさの1つの要因となってしまった。

今後の展望として伝統木構造の利・欠点や可能性を理解しながら修繕方法の提案を行い、将来的には文化財指定や移築保存も含みながら、地域文化遺産としての価値を再認識し、可能な限り住まいながらの再生・活用する機会を見出せればと願う。